



硫黄山

温泉天国・弟子屈。そのルーツは硫黄採掘からはじまった。

川湯に一步踏み入ると、ツーンと硫黄の臭いが鼻をつく。どの街でも味わったことのない、たじろぐほどのその源は、市街にほど近い硫黄山だという。その山肌は荒々しく、いたるところから絶え間なく噴煙が上がっている。大地の生々しい躍動を、まさに五感で実感できる。

8千年前ほど前、屈斜路カルデラで発生した大噴火により隆起したのが硫黄山である。その後、安政年間（1854年～）に小噴火した跡が、通称「熊落とし」火口と呼ばれている。

硫黄山には良質な鉱山資源である硫黄が眠っていた。その本格的な採掘が始まったのは明治に入ってからだった。明治政府は、外貨獲得のための貴重な資源として硫黄に注目した。明治10年、政府の許可を受けた釧路の網元・佐野孫右衛門が採掘を始めたのが皮切りで、その後、所有権は函館の銀行家から、安田財閥の祖・安田善次郎の手に移った。

明治20年、硫黄山から標茶まで採掘した硫黄を運搬する北海道で2番目の安田鉱山鉄道（後の釧路鉄道）が開通し、道南の恵山と覇を競うほど産出し、街に繁栄をもたらした。



エゾイソツツジ



エンジョイソツツジの群落



硫黄山周辺の散策路



つつじヶ原、朝の散策

◆つつじヶ原、朝の散策会

川湯温泉街から片道2・5kmの散策路。朝5時45分に川湯園地をスタート。ここには、釧路出身の作家・原田康子氏の代表作『挽歌』の文学碑が建ち、舞台となった川湯温泉の情景が刻まれている。森に入していくと、ミズナラ、シラカバ、アカエゾマツ、ハイマツなどの林がしばらく続く。突然展望が大きく開けると、エゾイソツツジの大群落が広がる。開花時期は見事の一言。その先に進むと、一転してハイマツの枯れ木ワラの荒涼とした風景となり、硫黄山が目の前に迫る。多い日には200人が集まるもあり、毎年通算で、8000人が参加する人気のコース。ボランティアガイドが説明してくれる。期間は6月初旬から9月中旬まで。

